

令和7年度 学校自己評価書

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	成果と課題	今後の改善点
学力向上×ICT活用	確かな学力と基本的な生活習慣を身につけた子の育成 ・学調、みえスタの分析と授業改善への活用 ・基礎学力と応用力の定着 →学Vivaや過去問などを整備（いきいきタイムで活用） ・全教員の研究授業の実施 →年間全研修2回、学年部研究授業4回 ・相手意識・目的意識を持った主体的な伝え合い ・ICTの効果的な活用を取り入れた授業改善 ・先進校視察、市内研究会参加、中学校区の授業交流 ・家庭学習時間の定着 →家庭学習時間(15分×学年)の定着(各学年90%以上達成) ・学校及び家庭での読書活動の充実	・全国学力・学習状況調査(6年生)結果(R7年4月実施) 平均正答率 国語:全国比+3.2P○、県比+4P○、算数:全国比+6P○、県比+7P○、理科:全国比+4P○、県比+6P○ ○無回答率が低く、書くことに抵抗感なく取り組む ○算数では、台形の意味や性質等の図形、測定に関わる問題がよくできていた。 ○漢字の書き取りや語彙力が低い傾向にある。それに特化した取組が必要である。 ▲問題の意図を見抜く力や条件に合わせて書くといった情報の取捨選択力が弱く、質の高い表現力が育まれていない。 ▲各教科における学習用語の理解不足があり、説明する力が弱い。 ・みえスタディチェック(5年生)結果(R7年4月実施) 平均正答率 国語:県比+28.2P○、算数:県比+25.5P○、理科:県比+23.5P○ ○漢字、ローマ字、文法などの言語領域や立式、計算、理科の知識などの基礎的な力はついている。 ▲理由の説明や面積や立式の説明など、相手や目的に応じて筋道を立てて表現する力が弱い。 ▲電気に関する分野を苦手としている。 ・みえスタディチェック(4年生)結果(R7年4月実施) 平均正答率 国語:県比+17.7P○、算数:県比+16.9P○ ○主述の関係性や内容の共通点などを見抜く力はついている。 ○整数の乗法や分数の意味、グラフの読み取りなどができている。 ▲漢字の書き取りや情報の取捨選択力が弱い。 ▲内容や理由を説明する力が弱い。 ▲時間に関わる問題が特に弱い。 ・児童「勉強がわかる」7月93.6%○→12月94.8%○ 保護者「学校の授業が分かっている」84.4%▲ 児童「chromebookの授業は楽しい」93.6%○ 保護者「chromebook使用の授業に楽しく取り組んでいる」93.1%○ ○「相手意識」「目的意識」を持たせたことで、表現することへの苦手意識や抵抗感が減り、意欲が高まった。 ○ふり返りともあてを交流することで、互いの思いや行動等を共有し、深く合うことができた。 ○ボランティアの学習支援により、基礎基本の力を高めることができた。過去問や学VIVAを活用して弱み克服を進めることができた。 ○全教員が研究授業を行い、互いの指導法を交流し、授業改善を進めることができた。 ○chromebookを活用した学習は、児童の学習意欲を高め、ICT活用のスキルアップにつながった。 ○先進地視察等で得た内容を本校の取組の改善につなげることができた。 ▲基礎基本の力を表現する力へ質を高める必要がある。 ▲児童に比べ保護者は学習理解度に差があると考えている。 ▲ICT機器をツールとした主体性を持った対話ができる授業改善を目指す必要がある。 ▲ICT機器を自主的に使いこなせるように進めていく。 ▲校区でえがいている学びのデザインである「自ら学び続ける子」の育成を進めていく。 ・家庭学習の定着 ・児童「家庭学習強化週間の平均時間」(15分×学年)以上 1年生:1学期27.7分○→2学期40.1分○、2年生:1学期43.5分○→2学期44.5分○、 3年生:1学期42.2分▲→2学期73.5分○、4年生:1学期61.5分○→2学期72.6分○、 5年生:1学期55.7分▲→2学期82.7分○、6年生:1学期50.3分▲→2学期108.6分○ 保護者「毎日の家庭学習に取り組んでいる」65.5%▲ ○主体性をもって家庭学習に取り組む姿を褒め、そのノートの成果を評価・掲示することで、自らがさらに取り組むなどの改善がみられる。 ▲家庭学習は個人差が大きく、個に応じたアドバイスや家庭の協力などが必要である。 ▲児童が誘惑に負けず、コツコツと学んでいく家庭学習の継続に取り組む。 ・学校や家庭での読書習慣の定着 ・児童「学校図書館・一人あたり年間貸出冊数」60冊以上 令和7年度11月末現在 一人あたり68.6冊○年間目標達成 児童「家庭学習強化週間の平均時間」 1年生:1学期13.2分○→2学期10.9分○、2年生:1学期23.9分○→2学期36.6分○ 3年生:1学期11.3分○→2学期13.0分○、4年生:1学期25.2分○→2学期23.6分○ 5年生:1学期19.9分▲→2学期24.2分○、6年生:1学期18.0分▲→2学期16.7分▲ 児童「進んで本を読んでいる」85.9%▲ 保護者「家で読書をしている」63.8%▲ ○家庭読書チャレンジカードなどの取組をきっかけに、家での読書が定着しつつある。 ▲読書も個人差が大きく、家で全く読書をしない児童もいる。根気強い指導が必要である。 ▲学年が上がるほど、スクリーンタイムの増加の影響が推察される。 ▲保護者は児童が家庭読書を行っていないと見ており、意識と実践力を高める必要がある。	☆本校で大切にしている「相手意識・目的意識」をもって自ら学ぶ子になるよう図っている。 ☆日常の学習規律を基盤に、情報モラル教育を丁寧に進め、ICTを活用して主体的で対話的、協働的な学びを深めたい。 ☆丁寧なノートづくりを指導するよう改めて見直すとともに、漢字・計算等の基礎基本の定着に力を注ぐ。 ☆適切なスクリーンタイムと自ら進んで行う読書習慣の定着を目指し、丁寧な指導と啓発を粘り強く進めていく。
長期欠席対策	不登校をうまない安心で魅力のある学校づくり ・すずこファイルの活用、定期的な会議の実施 ・子ども一人ひとりの状況や課題の把握と正しい理解による不登校を生まない体制づくり →児童の様子や支援方法等の情報共有、関係機関、スクールカウンセラーと連携した適切な児童理解 ・特別支援教育の基本計画に基づいた教育の充実 ・アンケートの実施、速やかな対応の徹底(児童への聞き取り、欠席児童への家庭連絡や家庭訪問) →「学校で友だちと仲良くしている」「学校へ行くのが楽しい」肯定的回答90% ・教育相談の視点をいかした教育活動 ・学校通信、地区代表者会での啓蒙活動 ・ゆりのき班活動による異学年交流 ・中学校区人権フォーラムへの参加と還流学習	・保護者「お子さんのことで気軽に学校へ相談できる」98.3%○ 保護者「学校はお子さんの悩みや問題に適切に対応している」98.3%○ ○綴り方の取組など、児童の悩みや思いなどに寄り添いながら、丁寧に聞き取り必要に応じた対応を行うなどの教育相談に努めた。 ○児童の情報共有を日頃から行い、必要に応じてスクールカウンセラーや関係機関と連携し早期対応を図った。 ○登校を渋る傾向のある児童や困り感のある児童については、子ども家庭支援課または教育支援課と連携を図っている。 ○特別支援学校の教員による専門的な研修を受講し、児童の状況把握や合理的配慮について研鑽を深めた。 ○「すずこファイル」を持つ児童について、支援会議を実施し、手立ての検討をすすめた。 ○日頃の取組の中で特別支援学級の理解を深めた。 ・児童「学校へ行くのが楽しい」91.1%○ 保護者「楽しく学校に行っている」86.2%▲ ○様々な取組を通して、良い言葉がけや相手の良い点を見ることの大切さを感じ取ることができた。 ○異学年交流により、互いのことを気にかけるようとする姿勢が育っている。 ○各教職員の人権課題に対する早期対応を意識することができた。 ▲支援会議やスクールカウンセラーの教育相談につながり切れていない。 ▲相手の気持ちを汲み取り行動することが難しい児童への取組を改善する必要がある。	☆どの子どもも安心安全で楽しく過ごせる学校になっているかを常にふり返りながら、普段からこどもの思いや願いに丁寧に寄り添う教師集団であるよう心がけていきたい。 ☆今後もこどもたちの様々な話題であふれる職員室づくりを進めたい。 ☆こまめに管理職や不登校支援担当、養護、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラー等と情報共有を行い、対応を実行したり外部関係機関と連携を図ったりし、こどもや保護者に寄り添いながら迅速かつ適切に進めていきたい。
地域連携	社会や人との繋がりを大切にした思いやりのある子の育成 ・児童の安心安全への環境整備 ・献書、交通安全対策の取組 ・協働型コミュニティスクールの推進 ・地域コーディネーターを中心に、学習ボランティアと連携し、地域人材をいかした学習の開発 ・地域行事への参加 ・ホームページや学校通信を通じた情報発信	・保護者「学校は児童の安全確保に取り組んでいる」98.3%○ ○通学路の安全確保のため安全安心ボランティア、民生委員等の地域の方に見守っていただいている。 ○運動場整備、校庭や周辺の除草、花壇整備等、地域の方に校内外の環境整備に尽力いただいた。 ▲サル等の獣害対策は、一部の方に負担をかけている。野生動物への対応が課題である。 ▲安全安心や防災に関わる庄内マップを最新版に更新し、周知する必要がある。 ・保護者「学校は懇談会や通信等で教育方針や教育活動・児童の様子をわかりやすく伝えている」94.8%○ ○日頃の授業や活動が伝わるよう学校ホームページや学校通信で発信した。 ▲児童の実態や保護者のニーズを把握し、発信すべき情報を精査する。	☆学校運営協議会と協働し、学校・保護者・地域それぞれが、または一緒にできることを考えていきたい。 ☆防災・防犯は重要な改善点である。庄内マップのブラッシュアップを協力していただけた方と共に進めていきたい。 ☆獣害対策については、危機管理マニュアルをさらに改善するとともに、対策を学ぶ機会を設けたり、保護者・地域に助けてもらいながらできる対応を今後も進めたい。
非認知能力育成	夢に向かって自己肯定感を高めながら意欲的に活動する子の育成 ・非認知能力における教員の意識向上と研修、実践 ・「未来応援人」をはじめとした出前授業の活用 ・一人ひとりがいきいきと活動できる場の設定 ・自己肯定感を高める取組 →「ポジティブカード」「ふわふわ言葉」の取組	・児童「非認知能力アンケート」 「やりぬく力」5月100%○→11月97.7%○、「自制心」5月94.7%○→11月93.2%○、「自己肯定感」5月94.7%○→11月97.7%○、「社会性」5月100%○→11月100%○ 「社会性」が特に良い、「やりぬく力」「自制心」「自己肯定感」が概ね良い、「自己肯定感」は改善傾向、「やりぬく力」「自制心」は僅かに低下 児童「先生は自分のことをほめたり認めてたりしてくれる」98.7%○ 保護者「認めたし褒めたりしている」100%○ ○非認知能力は概ね良い傾向にある。特に、互いに協力し合うなどの「社会性」の意識が高い。取り組んできた結果が表れている。 ○児童の頑張りが良さを「褒めて伸ばす」ことについて、学校だけでなく保護者の協力も大きな力になっている。 ○ポジティブカードの取組では、カードを掲示し意見交流することで、相手のよさに気づき伝えようとする児童が増えた。 ▲児童は、もっと認めてほしいという思いがまだまだあると考えられる。 ▲日常の教育活動で、児童の実態にあわせたソーシャルスキルトレーニングや道徳教育の改善を図る必要がある。 ▲児童が成長するにつれ、自身を見つめ直す力が高まり、より質の高い意識を求める傾向や、自己肯定感を低くする一因と考えられる。スモールステップを意識させ、一人ひとりに応じた一つひとつの達成感を充実させていく。 ▲ポジティブカードの取組回数を標準化し、学校全体の取組としてより充実させたい。	☆こどもたち個々の、または、集団としての良さを「褒める」等の評価を日常に溢れるようにし、自信をつけさせていきたい。自分や周りのありのままを受け入れることで、さらに高まっていこうとするこどもの育成を図っていく。 ☆出会いを大切に学習等、自己肯定感を高める授業に積極的に取り組む。
健全な体と心の育成	児童の健やかな体と心の育成 ・自らを律し、いじめや差別を許さず、その解決に向けて行動できる子の育成と集団づくり ・いじめの未然防止、早期発見の組織的取組 →迅速な情報共有、生徒指導担当を中心に複数対応 →学期毎のいじめ防止アンケート実施 ・体力テストの結果に基づいた体力作り →月・金の朝にラジオ体操に取り組み →週1回休み時間に異学年で体を使う活動の取組 ・基本的な生活習慣の定着 ・自助・共助を意識した防災教育や安全教育	○いじめ防止や反差別、仲間づくりに関わる授業を全学年で実施したり、差別やいじめの問題について考えたことを発表する人権集会に取り組んだ。 ○いじめアンケートを学期1回実施し、積極的認知と事後指導に取り組んだ。 ○4月・11月に、児童会がビンクシャツ運動に取り組み、児童や地域、保護者にいじめ防止を啓蒙した。 ○ネットモラルに関する授業を行い、SNSやネットに関わる正しい意識と行動の醸成に取り組んだ。 ▲いじめ防止や反差別に否定的な考えについての具体的な取組を整理する必要がある。 ▲児童のロールモデルとなる教職員自身の人権意識の更なる向上が必要である。 ・児童「起床時刻」1学期90.7%○→2学期88.9%▲、「就寝時刻」1学期86.2%▲→2学期87.7%▲ ○体育の授業改善やラジオ体操、駆け足、体を動かす異学年交流、児童会の運動企画等により、体力の向上を図ることができた。 ○運動場で遊ぶ児童が大変多く、遊びの中で自然に体力が育まれている。 ○早寝・早起き・朝ごはんの取組などへの家庭の協力のおかげで、児童の健康向上が維持できている。 ○防災・防犯の意識が高く、児童の避難訓練に対する自助・共助の力がついている。 ▲高学年になるにつれ、早寝・早起きができない傾向にある。スクリーンタイム増加等による家での過ごし方が一因と考えられる。 ▲更なる防災意識の向上や防災に関わる環境整備が必要である。	☆情報モラルに関わる学習を児童が授業で学ぶだけでなく、学校運営協議会やPTA等とも学ぶ機会を設け、学校・保護者・地域と一緒に考えて取り組んでいる場を創っていく。 ☆家庭学習強化週間を丁寧に取り組むことで、こども自身が適切なスクリーンタイムで過ごせるよう粘り強く働きかけるとともに、家庭での協力を啓発する。 ☆私たち教職員は、こどもたちを導く立場として、差別をなくす主体者であることが必須である。そのために、自分の意識をふり返りながら、こどもたちや周りの方々とともに差別をなくしていく言動ができるよう精進していく。
働き方改革	職場環境の改善、教職員の総勤務時間縮減、勤務規律の理解に向けた取組の推進 ・「ウェルビーイング」の視点をいかした学校づくり ・教職員の身身の健康増進 ・個々の力が発揮でき、互いに支え合う職場集団 ・校内外の安心安全な環境整備 ・職員のコンプライアンス意識の向上 →コンプライアンスミーティングの実施、危機管理についての情報共有 ・総勤務時間の縮減に向けた業務改善 →定時退校日の設定(月2日以上、第2・4水曜) →会議の簡素化・効率化 →留守番電話設置、ノー残業Day実施 →ワークライフバランスを大切にしたい職場風土の形成 →月80時間を超える時間外労働者延べ人数「0」 →平日における計画的な休取の推進	○「ウェルビーイング」が高まる学校づくりを推進したことで、よい職場を醸成することができた。 ○教職員が個々の力を積極的に発揮しながら教育活動を進めることができた。 ○児童が安心して過ごせるよう迅速かつ適切な対応がチームでスムーズに行えている。 ○「はめる」「論ず」などを言葉に込めてきたことで、児童が楽しく意欲的に過ごせているとともに、教職員自身も互いにポジティブに活動を進めていく姿につながっている。 ▲教職員や児童の意識が向上する一方で、安心安全な環境整備は進んでいない。できることから計画的に進めていく。 ・総勤務時間縮減に関わる取組(R7年12月末現在) 職員「年360時間を超える時間外労働者数」見込み3名○(3学期に時間外労働時間の縮減に努める) 職員「月80時間を超える時間外労働者の延べ人数」見込み0名○ 職員「一人当たりの年間休暇(年休・特休)取得日数20日以上6/13名(46.2%)」▲ 職員「1日以上の平日年休取得達成」10/13名(76.9%)▲(長期休業日を除いた場合3/13名(23.1%)) 職員「定時退校達成」月平均90.1%○ 職員「60分以内に終了した(大人数の)会議」月平均9%▲(少人数の会議は達成している) ○スクールサポートスタッフによる印刷や教材準備等、業務の分担の改善を進めている。 ○行事や業務を精査し、内容を熟考したり、負担を軽減したりすることができた。 ○平日の年休取得を始めたことが、安心して働けるモチベーションへつながっているという意見があった。 ▲行事や業務だけでなく学校の運営も精査も繰り返す行うことで、よりよい働き方への改善を継続していく。 ▲会議の内容を協議と連絡に分ける等、議事進行の工夫を行うことで、かかる時間をさらに短縮していく。 ▲時間外労働について、業務により時間的に量の偏りがあることも一因である。他業務を分担する等の工夫をすることで連続していない。また、持ち帰りの業務を行わざるを得ない状況も続いている。さらなる業務の標準化や業務量の改善を進めることが急務である。 ▲学期期間中の平日に年休がとれるよう進めていきたい。	☆平日に休暇が取りやすい業務状況の改善と教職員のチーム対応等の構築を図っていく。 ☆教職員の定数は法令で定められているとともに、一定数の教職員が加配されている。業務の見直しもかなり進んでいる。今後は校務や教育のDX化を更に進めたい。また、学校の取組に関わって、学校運営協議会やPTA、ボランティア等に協力をどう仰ぐべきかなどを相談しながら進めたい。